



郷土研究 : 第二次世界大戦を地図化して語り継ぐ

森, 康成

(Citation)

兵庫地理, 68:1-17

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482453>



郷土研究：第二次世界大戦を地図化して語り継ぐ

森 康成

I はじめに

本稿は、郷土¹⁾の事柄を地図化することによって語り継いでいくという観点から、第二次世界大戦時²⁾の郷土の様子を取り上げた研究である。最終的には、表題に挙げた研究が、地理学習につながるのかという点を考えてみたい。

ここでとりあげる郷土とは、行政単位の市町村ではなく、それよりも狭い範囲の、町内会、自治会と呼ばれている範囲の研究として話を進める。理由は、ここで、取り上げる事例は狭い、2キロメートル四方くらいの範囲の所の内容である。しかしながら、この研究は、日本のどこでも取り組み、さらに、一般化ができるものと考えている。

まず、たとえ話をしてみたい。戦争とは関係がないが、郷土がひどい被害を被った例として、1995年の阪神・淡路大震災が挙げられる。地震発生から50年後に、研究者なり、地元の人が地震当時の中学生の様子を知りたいと考えた場合、どのようにするであろうか。いくつか方法が考えられる。とりあえず、「当時の中学生だった人だったら、50年後だと60代の人になっている。」と考え、彼らの話を聞くであろう。その人たちが震災後、地震体験の作文を書いたと聞けば、図書館へ行って調べることができる。実際、震源地の淡路高等学校（広田ほか1995）や北淡西中学校2年生（1996）など阪神地区も含め、地元の小中高等学校で体験文集が作成されている。教育委員会の学校関係の対応を調べたければ、これも図書館へ行けば調べることが可能である。もし、記録がなかったならば、どうするであろうか。当時の体験談を語ってくれる人たちから出来るだけ多くの話や資料を収集して、当時の様子を調べるしか方法がない。また、事物として野島断層が残っており、断層について知ることができる。当時の遺物については、人と防災未来センターなど阪神、淡路地域の関連施設に残されており、見学し、

当時の事を学ぶことができる。

現在、第二次世界大戦の終戦の1945年から77年が経過している。当時のことを語れるとすれば、当時小学生として現在80歳代後半以上の人たちである。現在存命の人も多く、聞き取りはできそうである。一方、戦争に行った人たちは現在96、7歳以上であり、聞き取りができるとすれば、あと5、6年が限度である。

森（2018）は、震災の語り部の調査分析を行い、その結果、語り継ぎの条件を7つ挙げている。地域の災害事例があること、災害関連の事物の残っていること、災害を知る人が存在していること、災害の話を語る場があること、災害の話を聞きに訪れる児童生徒等が存在していること、使用する写真や話の内容があること、である。さらに、語り継ぐ人がその災害体験がない場合は、地元の人から被災体験を聞くことができるかどうかという条件を加えている。

第二次世界大戦の語り継ぎはどのようになっているのだろうか、どのようにすれば語り継いでいけるのだろうか。

本稿では、はじめに、先行研究、調査、調査結果の地図化と考察、おわりに、という順で話を進めていく。

II 先行研究

第二次世界大戦に関連した書籍、論文、郷土史を見てみたい。それらの中で、郷土の人々の戦時中の様子を取り上げて、さらに地図を参考に示しているものはどのような状況なのだろうか。

1) 書籍

戦記物、従軍記などは数多く出版されている。時間的にも1頁ずつ閲覧調査は困難である。内容は、地図で戦地の状況を示すものから、地図のないもの

までさまざまである。召集された兵庫県赤穂出身の西川（1982）は戦争の状況を多くの地図を用いて記述している。1枚の地図には兵庫県上郡出身者が戦いに倒れた地域別の人数を、例えばフィリピンでは、レイテ島で9人、ダバオで9人というように地図上に数字で示している。

郷土の人々の戦時中の生活を地図で示しているという観点から見ると、次のような書籍がある。『地図で読む戦争の時代』白水社（今尾 2011）には、軍事施設はその後どうなったか？という章で、地方都市の飛行場が地元の中学校に転用されている例を、昭和20年と平成9年の新旧の地形図の比較で示している。他にも地図で同様に比較の事例が載せられている。

学校教育では、小学校で社会科副読本が使用されているが、著者が災害関連で手元に所有の日本各地の平成、令和時代の小学3年用、または、小学3、4年生用15冊を見た。14冊で戦争について何らかの言及があった。戦争名を太平洋戦争としているもの6冊、戦争としているもの7冊、第二次世界大戦としているもの1冊である。内容は、2頁割かれているものが多いが、年表に数行だけのものも見られた。戦争に関連した地図は、3冊に見られた。

栃木県足利市立教育研究所（松本ほか 2000）は、2頁分「50年ほど前せんそうがあった」という項目で、市内の地図に地区境界を示し、該当の場所に赤丸で爆弾が落ちて被害があったところを示している。沖縄県那覇市教育委員会（1998）は、2頁分「せんそうのころの市の人々のくらし」の中の地図で、市の一部の空襲で焼けた部分をピンク色で示している。石垣市教育委員会（1997）も2頁分取り上げ、地図にマラリアの発生村名を記し、避難先を点で示し、避難経路を点線の矢印で示している。北海道の離島の奥尻町教育委員会（1997）は3頁に渡って戦争に行った人の話や空襲で防空壕へ逃げた話などを載せている。地図はない。令和2年兵庫県南あわじ市教育委員会（2020）発行では、2頁分爆撃機や出征家庭の話があり、地域の史跡やお寺などを入れた史跡探しの地図を作ろうと述べている部分がある。地図は示されていない。

戦争とは異なるが、人が亡くなる災害事例では、津波被災の記録や体験談の書籍が見られる。チリ地震津波被災の高知県須崎市（村上、1995）の事例では、地図に狭い地域の遭難地点が×印で示されている。体験談では、氏名、年齢、住所などが示されている。最近の東日本大震災の記録では『千葉県旭市 語り継ぐいいおか津波―東日本大震災 被災者聞き取り調査記録集―』（被災者聞き取り調査記録編集委員会 2012）でも、市内の地区名が地図で示され、氏名、年齢とともに手記が載せられている。

2) 論文

地理学の論文では、どのような研究があるのだろうか。人々の生活関連で、戦争を取り上げた論文を地理学関連の学会誌で最近のものを調査した。

『兵庫地理』の1990～2022年では、徐（1999）がある。これは、戦後の北京の住宅建設と住宅類型を調べたもので、戦前からある旧市街地と戦後形成された新市街地の世帯のトイレ専用、トイレ共用、トイレなしの状況を円グラフを使い、各区の地図上に表示している。地図で分布を示す参考にはなるが、タイトルには戦後という語が使用されているものの、直接戦争に関連したものではない。松本（2018）は1942年に記録された空中写真の分析による「戦時中の兵庫県南東部沿岸部の地理的空間の変容」と題して大阪周辺を撮影した航空写真による研究紹介をしている。西宮市鳴尾浜の1942年と1947年の地形図と1942年の航空写真を比較するなど、いくつかの場所を取り上げて空中写真で比較して、それに写る施設を解説している。空中写真については「敗戦による混乱の中で消失ないし散逸してしまい…その絶対数は少ないと言わざるを得ない」と述べており、どの地域でも空中写真が存在し研究できるかというところではないようである。

『瀬戸内地理』『地域地理研究』の1992～2022年では2本ある。一本は、光岡（1996）が両大戦間日本農村の結婚難問題を取り上げている。大都市圏の農村での結婚難を論じたもので、地図では示されていない。もう一本は、水元（2007）が岡山県東備地区における耐火レンガ工業について研究したもの

で、地形図上にロウ石鉱山の分布図、耐火レンガ工場の分布図を示し、それぞれの地点に番号を振り、凡例に番号で鉱山名、工場名を示している。これは地方の町の中の地域を取り上げたものであり郷土研究に当たると考えられる。『地理学評論』は冊数が多く、2010 年～2022 年を調査して、直接戦争の影響に関する論文が 3 本あった。森田（2018）が両大戦間期の貨物輸送における自動車の進出と国有鉄道の対応を研究したもので、地図では、1930 年代の近畿と周辺県の各都市の国鉄と貨物自動車の貨物発着数を円グラフの大きさで示されている。網島

（2014）は大阪市船場の中の一つの町を取り上げて医薬品業者の名前まであげて調査をしている。業者の区単位でのグラフの分布図はあるが、該当町の業者の分布図はない。梶田（2018）のアメリカ合衆国の大戦時の都市構造モデルの論文では、地図は見られない。

いくつかの地理学会の文献を見ただけであるが、戦争関係の論文が少ないことがわかる。また、狭い範囲の地域は、水元（2007）のように、現地調査で地図が作成されていることがわかる。

狭い地域の施設その他の地図化は、戦争関連以外の論文はどのようになっているのであろうか。『兵庫地理』では、永田（1993）が神戸市北区山田川流域の水車が明治期から昭和初期にかけてどのようになっているのかを、川の流域を踏査し、2 万 5 千分の 1 の地形図に○付き番号を振って示し、本文中にはそれぞれについて簡単に記述している。『地域地理研究』では内田（2010）がため池による水害の記録と被災体験の継承について、京都市亀岡市平和池の決壊を例として取り上げている。1951 年に発生した水害で被災した 80 戸の地区の被災図が載せられている。手書き地図では流失家屋が斜線で示され、各戸には死者数の数字が書かれている。この被災の継承では、慰霊碑が建立され年 1 回の慰霊祭、防災訓練、防災マップの作成がなされていることや、地区の小学生が区の人から話を聞き、水害展示を見学していることなどが紹介されている。

3) 郷土の資料

淡路島では、平成の合併前や昭和の時代に各町が町誌を出版している。『北淡町誌』（町誌編纂委員会）を見ると、昭和 50（1975）年に編纂されたにもかかわらず、歴史は大正時代までで昭和の部分は書かれておらず、第二次世界大戦についても言及がない。一方、教育や産業、生活などは昭和の時代の事も含めて載せられている。隣町の『津名町史』

（1985）も通史は明治で終わっている。戦争については、別の章に戦没者名と戦前の社会教育が 1 頁載っているだけである。町誌史、市誌史ではなく、狭い範囲の地区や集落の郷土誌史ではどのように記載されているのだろうか。全国各市町村内では、町内会や自治会はたくさんあり、著者は災害関係の調査で参考に全国あちこち図書館をみることもあるが、町内会自治会単位での郷土誌史は少ない。ここで話題にする淡路島の北淡地区には町内会は 2023 年現在 53 あるが、北淡図書室³⁾では、これらの町内会の書籍の郷土史は、1 町内会のみしか見られない。しかも、その中で歴史については大正以降は記載されていない。淡路島の南あわじ市では、榎列史研究会（2012）の『おのころ風土記－榎列の歴史と伝承』というのが最近の編集であるが、戦争については戦時教育について 9 行書かれているのみであり、地図はない。後で述べるが、ここには戦時中飛行場があった。兵庫県社町の一地区『巨勢誌』（1978）では 266 頁あるが、戦争については教科書について数行と、教育勅語に半頁記述されているのみである。この近隣の北条町では、軍事施設や飛行場があった（加西市史編さん委員会 2011）。他の地域ではどうなのか。著者が災害の研究でたまたま入手した 2 冊を見てみたい。1 冊は高知県旧大月町の小集落の、『ふるさと小才角』（浜口 2009）という郷土史は、471p と頁数が多く、軍事、戦没者名、戦没場所など 12 頁が割かれている。戦没場所等が表にされているが、地図はない。もう 1 冊は愛知県知多半島の 1 地区である『東端区誌』東端区誌編纂委員会（2010）である。211 頁あり、太平洋戦争の防空監視、疎開、戦死者名に 16 頁が割かれている。地図はない。少数見ただけであるが、戦争について項目がない、町内や近辺にかつて戦争関連施設があつ

ても言及されていない、または、地図表示がされていないものが見られることがわかる。

アメリカの中学の社会科に関する論文で、郷土の戦争を取り上げているものがある。Scheuerell (2021)は google tour builder を使って、南北戦争に参戦してカンサス州のある所に落ち着き郡を創設した退役軍人と住民 600 人余りについて調べる授業について述べている。退役軍人について、地域社会の中でどのくらいの割合が退役軍人であったか、どの戦場で参戦したのか、何人の軍人が戦いまたは病気で死亡したのか、ここへ落ちついた軍人はどの州からが一番多かったのか、などの 12 の質問が設定され、それに対して生徒はいかにして調べるか仮説を立てるよう指導されている。生徒は、軍人のそれぞれ召集された場所を地図に印し、参戦した戦場、戦後の郷土での活動などの情報を書き、併せてそれぞれの軍人に関係のある重要な川や建物などの地理的情報もリンクできるようにしている。この論文からは、アメリカでは高校生が郷土の 1800 年代の南北戦争の参戦者について調べていること、昔の情報がありそれが手に入ること、関連したことを地図に示していることなどがわかる。しかし、論文では、地図は載せられていない。結論で、著者は、蓄積された資料により長く忘れられていた郷土の人について生徒が調べることができるかと述べている。今日、生徒は、デジタル化された一次資料、二次資料にアクセスして調べることができるかとある。

このように見てくると、郷土の戦争について、残された資料が後の検証につながるということがわかり、記録を残すことの重要性がわかる。

Ⅲ 調査

郷土に関連した戦争の地図化について、先行事例は少ないが、狭い町内会、自治会単位での郷土誌史作成過程で第二次世界大戦を取り上げている事例を見てみたい。取り上げるのは、淡路島北部の中山間地域に位置する 2 km 四方の小さな A 町内会である

⁴⁾。2022 年現在 43 軒が登録されている。2018 年に町内会に著者を含めた郷土誌史作成の研究会が発足し、講演会の開催、町内探索調査などをして取り組

んでいる。年度ごとに取り組みテーマを決めており、2021 年度に第二次世界大戦の記録を収集して記録冊子に載せている。経緯は以下である。

1) 町内への調査の告知

研究会は趣旨を記載したチラシを作り、例年夏が近づき報道で戦争の話が取り上げられる時期に、町内へ市の広報など配布する折に配布した。それと一緒に、第 1 表を配布して、提出をお願いした。書き方は、実際の町内の人の記録を載せて、例を示した。表の〇〇事例は実名だがここでは〇〇にした。これについては、提出があったのは少数で、その後著者が 1 戸 1 戸個別に訪問してその調査表に記入し、話を録音した。記録については、戦没者や情報提供者の名前など個人情報もあるが、名前がないと誰の話かも不明となり、20 年 30 年と経過するにつれて伝えることができなくなることや、何れ皆死ぬため、家族間でも話が伝わらなくなることなどを理解してもらい、冊子に載せることを了承してもらった。戦争では見落とされると考えられる、招集年齢だが何らかの理由で戦争に行っていない人についても情報提供をしてもらった。A 町内への疎開についても、町内の高齢者に話を聞き、町外の人には電話で家族に伝えられている話を聴取した。

2) 資料収集

語り継ぎでは、何を資料として収集すればよいのか、冒頭で紹介した森 (2018) の語り継ぎの条件を参考に見てみたい。

地域では戦争に関連した話が老人会、阿弥陀講などでも話されており、関連の事物も残っている。町内ですぐ目に付くものとして、町内中心部にある墓地には戦死者の名前、没年、戦没場所などを彫り込んだ先のとがった石と（方言；せきと、石塔）が見られる。このようにいくつかの石とが集合して祀られている場所もあり、また、個人の墓地に祀られているものもある。これについては、役員で調査し、個人墓地では該当の家の家族から話を聴取した。他に関連の物としては、淡路島の戦没者が淡路市中心部の伊弉諾神宮の祖霊社に祀られているが、そこに

第1表 戦争調査アンケート表

資料：A 町内会誌史研究会

浅野南出身の人について						
戦争に行った人						
名前	生年(昭和、大正)	入隊の年、どこに	海軍、陸軍、空軍など	戦地(国名、場所など)	帰国した年、場所	その他
(例) ○○○	大正 6	昭和14年。大阪府堺市金岡、輜重兵第47隊第3中隊(自動車隊)	陸2等兵(入隊時)～曹長(帰国時)	14年広東省、15年上海、16年泰国、17年シンガポール、18年ジャカルタ、19年セレベス、21年ジャワ島デガール港	昭和21年7月、宇品港	
何らかの理由で戦争に行かなかった人 (招集年齢だけ)						
名前	生年(昭和、大正)	理由など				
学徒動員、挺身隊、勤労奉仕などに行った人						
名前	生年(昭和、大正)	勤労奉仕、挺身隊など	場所	内容	何年のこと	その他(学校名など)
疎開で浅野南へ来ていた人						
名前	生年(昭和、大正)	どこから、県、市町村	いつからいつまで	南でどのような生活をしていたか	その他(親戚、知人など)	

は、銅板に氏名が彫られ、各地区の記録冊子には、故人の写真、出身地や没年、戦没場所、などが1頁ごとに記されている。それを役員らで訪問し写真を撮影した。また、町内の歴史民俗資料館で戦時中に書かれた戦地の軍人への見舞作文なども遺族関係者らと訪問して写真に収めた。大きな遺物としては、防空壕が挙げられる。これについては、各戸で尋ね、残存の場合は地図に印をつけ、現場を確認して写真撮影をした。

戦争を知る人は、おおむね80代後半以上の人であり、個別に話を聞き、録音をした。また、高齢者で、町内から町外へ婿や嫁に行った人で話を聞くことのできる人には、著者が出向いて話を聴取した。

戦争に関連して残っている写真や体験談の内容は、個別に訪問して話を聞き、写真に収めた。生還した人で自費出版している人がおり、そのコピーをとらせてもらった。戦地からののがきも保存している家庭では、写真撮影をし、差し支えない内容は冊子に載せることにした。以上、話についても、残っている事物についても氏名付きで冊子に掲載することは了承を得た。

3) 資料の整理

収集した資料は、話についてはテープ起こしをし、以下で述べるような項目表にして分類をした。資料については、著者が別の方言調査の分布の研究(森 2022)を応用して、地図化をすれば町内の人もわかりやすいのではないかと考えて、MANDARAで処理をした。記憶の保持については、Broner(1964)が言葉を聞くだけ、写真を見るだけ、写真を見ながら言葉を聞くという3つのパタンで、120時間までの記憶の保持率を調査している。その結果、単なる説明より言葉と写真の組み合わせの方が効果のあることを示している。語り継ぎにも、言葉だけでなく地図と組み合わせることによって効果があるのではないかと類推される。

IV 調査結果の地図化と考察

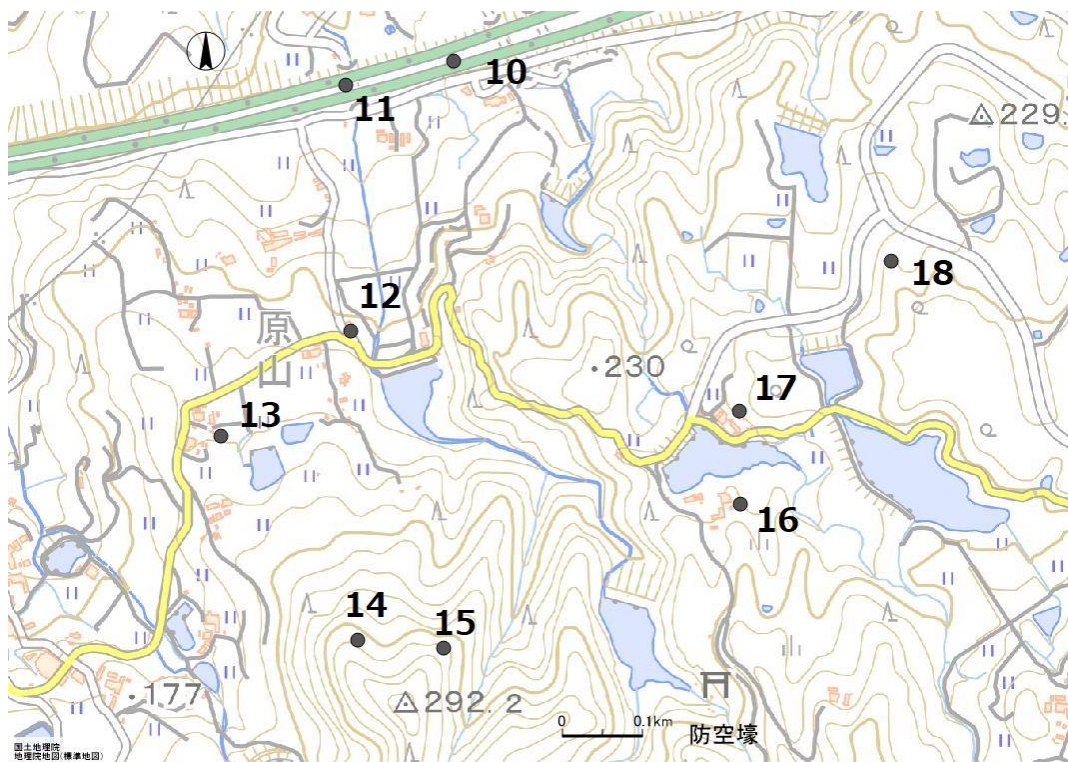
ここでは、地図化できた項目について取り上げてみたい。以下、地図は、国土地理院地図の一部を加工して使用している。

1) 防空壕

各戸の年配の人に尋ねたが、所帯主が50、60歳くらいの場合、親が早くなくなったため聞いていないという例もあり、尋ねる場合は、自分の家のものでなくても周辺で知っている防空壕をあげてもらった。併せて、防空壕にまつわる話も聞きとった。その結果、様々なことが判明した。町内に18も防空壕があり、予想外であった。場所は、山裾が少し突き出たようになっている所、山肌が切り立って露出している所、田んぼの岸が山になっている所などが見られた。同じ地域内で引っ越した家では、古屋敷が竹林と化し、防空壕のあった場所もわかりづらくなっている事例があった。終戦後なくなった家、また、語り継がれていない家もあり、当時は防空壕の数がもう少し多かったと推測される。次のような話があった。「山の突き出たところを両方から掘った。」「つる（つるはし）の柄を短く切って穴を掘り進むのに使った。」「近所2、3軒で一緒に使った。」「中の長さは、2、3mから10m位のものもあった。」「高さについては、「大人がかがむくらい」、「子供の背くらい」などおおよその表現がされた。一つ

の防空壕でも、近所の人が別の話を語ってくれた例もあった。いくつも話が収集できたのは成果であった。「そんなところにもあったんか」というような感想があったが、町内でもその家の人しか知らない防空壕があり、記録しておくことの大切さを認識した。高齢者は、子供の頃遊んだという記憶を話してくれたが、今は埋まったり、なくなってしまうたりで、子供が遊ぶということもなくなり、言い伝えは、防空壕という言葉か、現存するものについても防空壕という単なる物でしかなくなっている。

場所は国土地理院の地図を閲覧し、緯度経度を記録した。これを『MANDARA10』（谷 2018）に紹介されているエクセルの形式で入力し、該当箇所は小さい黒丸で示して地図を出力した。その後ペイント上で番号を振って整えた（第1図）。冊子では、番号表を作成し、そこに、聞き取ったエピソードを記入して参照できるようにした。A町内会では、中央に高速道路が走り、圃場整備がなされてかつての場所を喪失してしまった例もある。終戦当時の地図を使って表示することも考えたが、地域の状況は今後そう変わらないと推察されるため、調査当時の2021年



第1図 A町内の防空壕の位置

2枚組地図の一部 資料：A町内会誌史研究会

の地形図に表示をした。

ここで注意したいのは、地図の座標を MANDARA に読み込ませる時に、地理院地図の座標を確認して入力するということである。失敗例として、google マップで位置を確認して緯度経度をメモし、入力した時は、ずれた場所に印がつけられた⁵⁾。他には、入力間違いもあるということを念頭に、地図に出力された位置の確認が必要である。狭い範囲の地域の中の点であるため、間違いがないかより注意が必要である。

先行研究で、小学校副読本について述べたが、それらの中では、防空壕へ避難したという記述が全国的に見られ、小学生には理解しやすい教材と思われる。ただ、調査した戦争記述のある 14 冊の中には地図化されたものは見られなかったが、時代が変わりデジタルマップが使えるようになり、防空壕の調査は地図学習と郷土研究を組みあわせて学習できる良い教材と考えられる。

2) 勤労奉仕先

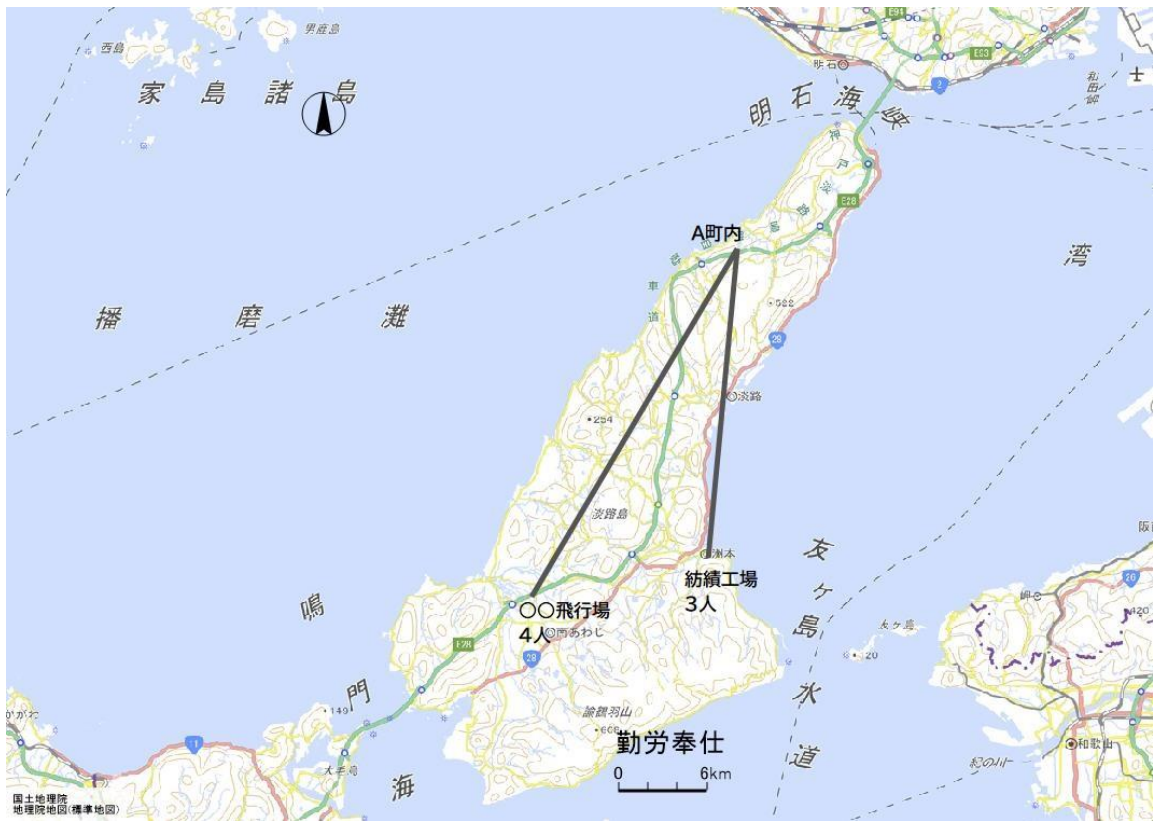
昭和 3～5 年に生まれた女性から、女学校へ行っていた時の話を聞き取ったが、その折に勤労奉仕の話があった。淡路島洲本の紡績工場⁶⁾と、現南あわじ市の榎列の飛行場である。現淡路市の郡家に女学校があったが「3 年か 4 年行かなあかんかったんやけど、戦争が厳しなって、ほんで、繰り上げ卒業や言うて、3 年 3 月で卒業して、洲本の紡績へ行った。みんな行かされた。」と昭和 3 年生まれの女性が述べている。「父親が、三原の飛行場の整備に行とったくらい。(昭和) 18 年か、19 年くらいかな。」と昭和 16 年生まれの男性が述べている。集計して 7 人の証言が得られ、それを地図化した(第 2 図)。個人個人の家では誰がどこへ行ったということなどは語り継がれているかもしれないが、このように集落で数字がわかるということはないため、この調査の意義はあったと考えられる。話が伝えられていない場合もあるため、他にもいた可能性はある。

第 2 図に、〇〇飛行場と記してあるが、これは、著者がこのように書いたものではない。聞き取りで

は、もともと軍の機密情報のため、〇〇飛行場と呼ばれていたという話である。兵庫県内でも、飛行場は、例えば、東播地域では、明石(長尾 2021)、加古川(加古川市史 2000; 一色町内会史誌刊行会 1986)、三木(三木市立みき歴史資料館 2022)ほかに存在した。このように戦時中は、比較的身近なところに飛行場が存在していた。したがって、飛行場の周辺市町村では、勤労奉仕に動員された話を聞き取ることが可能であると考えられる。南あわじ市の例では、そこの住人に淡路島北部から勤労奉仕に行っていたことを伝えたと、驚かれたことがあった。このことから、飛行場建設時の資料を入手できれば、また、当時飛行場で作業をした人を探して聞き取りできれば、逆にどの町のどの地区から勤労奉仕に来ていたかの地図が作成出来ると考えられる。加古川市の 1 町内会の『水足史誌』(1990)のように、軍事という章を設け、詳しく記載している事例も見られる。

3) 疎開

広辞苑(新村 2011)によると、疎開とは、「空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること」と説明されている。疎開については、冒頭で見た小学校副読本にはほとんど記載がないが、南あわじ市の副読本では神戸大阪に近いためか言及されている。A 町内会の例では、神戸で焼け出され A 町内へ疎開してきた人は、町内から分家をして神戸へ出ていた人のため、実家へ疎開していた。この人は神戸のどのあたりというのが聞き取れたため、地図(第 3 図)には具体的に矢印を引くことができた、他方、単に神戸や明石だけしかわからない話もあり、神戸、明石は東西に長いため、地図表示は割愛した。地図作成により、半数以上が都会から疎開していたということがわかる。A 町内会では、遠く関東方面からの疎開はなかったが、そのような場合は、周辺地図と日本全国図のように 2 種類作成する必要が考えられる。家族で、または、子供だけ疎開している例が考えられ、人数を地図に書き入れることも考えられる。ここでは、1 家族ずつ取り上げて線を引いた。



第2図 A町内からの勤労奉仕先

全7人 資料：A町内会誌史研究会



第3図 A町内への疎開元

全15家族中場所のわかる8家族表示 資料：A町内会誌史研究会



第4図 A町出身者戦没地

全10人。他1人は戦没地不明 Sは昭和。 資料：A町内会誌史研究会

4) 戦没地

戦没地については、多くは細かい地名の情報がなく、島なら、例えば、何何島という程度である。国外であっても、病院で死亡の場合は、病院名がわかっていた事例があった。シベリア抑留については、戦没地は沿海州何何地区何何という地名がわかっている事例があり、googleマップで確認したが地名は発見できなかった。舞鶴引揚記念館に尋ね、抑留地はたくさんあり、特定は困難だが、どことどの間辺りだという情報を得て、そのあたりに印をつけた⁷⁾。このように、大まかな地点に印をつけるという作業だが、西太平洋地域全体を表示する地図（第4図）で示すと、郷土からどのあたりへ行っていたのがということが判明する。また、戦没年は大体判明しており、それを見ると、戦争末期に死亡している事例がほとんどである。シベリアでは戦争終了後抑留地で死亡している事例が

ある。出征者31人中11人が死亡している。先に、郷土の戦争関連の地図がほとんどないと述べたが、このようにすると、戦争の実態がよく把握できる。

5) 転戦経路

戦争から生還した人で、手記を残している例は図書館の書架で一般によくみられる。ここでは、手書きの記録の事例があり、年、場所が記録されており、それを取り上げて地図化している。場所名は、広東省や泰国などのように広い地域を指す地名しかないが、本人の他の記録や、他の戦記などを参考に、おおよそのあたりを推測してMANDARAで地図を出力した。航路図も推測で、ペイント上で手書きにした（第5図）。所属の部隊名が判明しておれば、他の戦記などを参考にルートを確定できる。



第5図 A町出身B氏の転戦経路 B氏手記より Sは昭和 資料：A町内会誌史研究会

6) 語り継ぎの条件と語り継ぎに果たす地図の役割

語り継ぎにおいて、森（2018）を参考に、語り継ぎの条件と地図化がどのような役割を果たしているのかを見てみたい。冒頭で示した災害語り継ぎの7つの条件にある「災害」を「戦争」に置き換えると次のようになる。①語り継ぎには、地域の戦争事例があること、②戦争関連の事物の残っていること、③戦争を知る人が存在していること、④戦争の話を語る場があること、⑤戦争の話を聞きに訪れる児童生徒等が存在していること、⑥使用する写真や話の内容があること、である。⑦さらに、語り継ぐ人がその戦争体験がない場合は、地元の人から戦争体験を聞くことができるかどうかという条件がある。

地図化に関係するのは、主に①⑥と考えられる。これらも含め、順に考えてみたい。

1. 戦争事例

地域に残る防空壕、勤労奉仕の行き先、疎

開、戦没地、転戦経路の5つの事例を取り上げて、地図化ができた。これらの地図の中の各個別の事例については、郷土誌史の冊子の中では、地図と説明の表に番号を振って参照できるようになっている。場所の特徴も書いており、地図により町内の人も防空壕を確認できる。他に、数が少ないため地図化はしていないが、戦没者の石塔や空襲に備えて監視をしていた施設のあった場所も地図に落とし込むことができる。

2. 戦争関連の事物

出征した人の家庭で受け継がれて保存されている召集令状、戦地からのはがき、生還した人の水筒、軍服、脚絆などの持ち物など多数ある。出征のなかった家庭でも、戦時歌謡曲や軍歌のレコード、学校での教科書など残る場合も考えられる。しかしながら、これらも、代がかわると、散逸または廃棄される危惧があり、資料としての価値を認識してもらおうという活動も

必要と考えられる。

3. 戦争を知る人、語り継ぐ人の存在

これらの人の存在については解決が難しい。戦争を知る人は今後 10 年くらいでいなくなる。その話を聞いて語り継ぐのは、ここでの事例の A 町内会では、老人会や講などいろいろな集まりでの断片的な会話をする高齢者である。地震などの災害の語り部については、国内では、次世代として小学生を育成している団体も見られる（内閣府 2021；佐々木⁸⁾ 2023）が、そのような試みは小さな町内会では難しいと考えられる。先行研究で紹介した水害事例（内田 2010）のように、地域の公民館で関連の展示をして、地域の小学生に見学してもらい話を聞いてもらうイベントを継続していくなどの工夫が必要であると考えられる。

4. 戦争の話を語る場

これについては、上記したように、町内では老人会や講で世間話として語る場はある。また、行政的な大きな範囲での町では、北淡歴史民俗資料館があり、ここでは、戦争関連の物や、当時の戦没者への弔辞、戦地の兵への慰問の作文など資料を所蔵している。語り部として、90 歳ちかくの高齢の人が、訪れる淡路島の小学生らに戦争の話をしている。神戸で体験した自身の戦時中の闇市の話や、返礼人形の話などである。返礼人形の話とは、アメリカと日本の関係で、お礼に送られてきた人形を、戦争になり、人形は燃やせと言うのに隠し持っていた人がいたという話である⁹⁾。Ⅲの 2) にあげた伊弉諾神宮の地元の小学 2, 3 年生が地元のお宮さんを調べるということで訪れる際に、この祖霊社の中へ入ることはないが、戦争はやってはいけないという話と共に戦争の話をすることがあると神職の一人は述べた¹⁰⁾。問題は、語る場がない場合で、これについてはそれぞれの地域で考えていく必要がある。

5. 戦争の話を聞きに訪れる児童生徒等の存在

上記の資料館では、館員の話として、教科書に戦争の話があり、校外学習の小学 3 年生への

講演依頼がよくあるという。淡路島の北部にある施設だが、島内全域から訪れている。需要があり、貴重な存在になっている。

6. 使用する写真や話の内容

写真については、上記 2 で取り上げた各家庭に残っている戦争関連の物を撮影して、語り継ぎに使用することが考えられる。当時の生活写真については、A 町内での「そんなのない」という回答に見られるように、当時は写真撮影が特別と考えられ、丹念に聞き取りで発掘していくことが必要であると考えられる。話の内容については、聞き取って文字化すれば残っていき、語り継ぐ資料となる。聞き取った話から、テーマを決めて、先に述べたように地図を作成して、それを使用するとよいと考えられる。

7. 戦争体験がない人が語り継ぐ場合

森（2018）は、災害の語り継ぎで、兵庫県南部地震の体験のない高校生が、体験者の経験談を数多く聞き取り、語り継いでいる例を示している。戦争の場合も、よく知る人から話を聞いて、自分の中に取り入れて語り継ぐことが可能だと考えられる。

7) 小中学高等学校での教材として

ここまで、自分たちの生まれ育った郷土を対象にして、調査して、地図化して、語り継ぐということについて述べてきた。語り継ぎでは、先行事例で見たように、災害被災地で小中高校生の取り組みがなされている。この第二次世界大戦の地図化という取り組みが、学校の教材として成り立つのかという点を、学習指導要領（文部科学省 2018；2019；2020）を参考にしてみたい。ここでは、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編を〔小〕、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会篇を〔中〕、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説地理歴史編を〔高〕として参照してみる。

本稿では限られた狭い範囲を事例としているため、郷土研究としているが、地域研究と置き換えても良い。

小では、社会的事象について調べまとめる技能の説明で、「基礎資料として、聞き取って自分のメモにまとめる、地図上にドットでまとめる、数値情報をグラフに転換する (p. 152)」と述べられており、小学生は、地元で聞き取りをすることにより、これらの作業もできる。第二次世界大戦については、中には「戦時下の国民の生活については、身近な地域の事例を取り上げるなどして、戦時体制下で国民の生活がどう変わったかについて着目するとともに、平和な生活を築くことの大切さに気付くことができるようにする。(p. 117)」とあり、第二次世界大戦と地域とのかかわりについて言及している。高では、歴史の特質と資料の取り扱いで「歴史の叙述には、諸資料の検証と論理性などが求められることに気付くようにする…(中略) 歴史叙述のためには、過去の事柄について探る手がかりとなる材料である歴史資料が必要であることなどに気付くよう、指導を工夫することが大切である。(p. 138)」と述べられ、資料の取り扱いについてもふれられている。

ところが、現状は、先行研究や郷土史作成の中で見て来たとおり、第二次世界大戦については、郷土の資料がほとんどない状況であり、検証もできない状況である。ここで示した、地域での調査や地図化をすれば、歴史の一次資料、または、二次資料は入手できると考えられる。また、その過程で、他の資料はどうなのであろうかと複数の資料の必要性や解釈についても考える機会を得ることができ、指導要領の趣旨に沿ったものとなると考えられる。

先に見た副読本では、小学校 3, 4 年生の学習として、絵地図に赤丸で分布を示す地図作業が載っており、小学高学年では調べて分布図を作る作業概念はあると考えられる。教育雑誌記事には、東京都の小学校の 4 年生に (新宅 2023)、地理院地図にアクセスして玉川上水の取水堰の座標を表示させる作業事例が見られる。デジタルマップに落としこまなくても、紙媒体で郷土の第二次世界大戦の記録を地図化して語り継ぐ

ことはできると考えられる。

森 (2011) の論文には、高校生が防災科目の宿題で作成した自分の住む周辺での防災マップの成果が載せられている。「自分の家族や近所の人と防災の話をして認識を新たにする」と述べられている。これによってわかるのは、先に挙げた語り継ぎの条件の、語る内容 (地域の災害事例) があり、関連の事物 (危険箇所、過去の災害事例) があり、災害事例を知る人 (親や、祖父母) がおり、聞く人 (高校生) がおり、語り継いで話す場として、学校の教室があるということで、条件はそろっている。防空壕を調べるのも同様と考えられる。

高等学校の『地理総合』教科書 (菊地 2022) には、地域の郵便局、スーパーマーケットの位置を調べて紙の地図に書き込む作業と、同じ作業を GIS を使って位置と立地を考える作業が提示されている例がある。本稿で示した防空壕の位置を調べるというのは、同様の事と考えられる。田舎の場合は、スーパーマーケットの分布を調べるより、防空壕などの田舎にもある事物を調べる取り組みをする方が分布と立地の学習に適切かもしれない。

現実の学習事例としては、上記Ⅳの 6) の 4 で述べたように、第二次世界大戦について、小学生が資料館や神社へ見学に来て話を聞くという校外学習が実施されている。現状は、話を聞いて帰るというだけで、誰かに伝えたりはしていないようであり、語り継ぐという点では今後の課題である。

本学会の発表でも、このように戦争を地図化するという試みについては、調査をしてみたいという感想が聞かれた。ただ、学会参加者からは似た実践事例を聞いていないため、これからの課題と考えられる。

以上により、ここで示した事例は、学校での教材として成り立つものと考えられる。

8) 問題点

1. 地図作成

海外の戦没地、転戦地、転戦経路を作成するのは、現在の地図との対応が求められるが、言語の問題で同定が難しい場合が生じる。例えば、資料として戦地からのはがきを利用する場合、旧漢字や古文書に見るような崩し字を読む知識が必要となる場合がある。地名は、A町内会の資料では、投函地の住所として「臺灣」が見られた。これも知らなければ難しい。文面の崩し字は家族が読むことのできない事例が見られた。A町内会では見られなかったが、中国の地名も調べて位置を特定していく必要が生ずることが考えられる。戦前は日本の地図も旧漢字が使用されており、はがきなどに見られる中国、台湾などの地名は旧漢字である。現在は、google地図で調べようとすると、言語を日本語にしても、中国の地名は簡体字でフリガナがない。中国語には、簡体字と繁体字の言語表記があり、繁体字を選べば昔の字と比較して探すことができる。韓国の地名はハングルと英語アルファベット、一部カタカナである。ロシアの地名はロシア語、英語アルファベット、一部カタカナが示されているが、細かい地名になるとロシア語と英語アルファベットのみの表記になっている。ロシアの都市名は1970年代に変更になっている例があり¹²⁾ 確認が難しい場合もある。

2. 個人情報

A町内会の郷土誌史作成では、個人的な話は、個人情報ということで提供を拒否する人も考えられたが、研究ではなく郷土史を編纂するという目的があり、拒否する人はいなかった。知っている話を提供しておかないと、死んでしまったら話が伝わらなくなると考える人や、いずれ死んでしまうから名前が出て問題はないと述べた人がいた。その結果、戦争を取り扱った冊子には、情報提供者である家族の名前なども掲載の同意を得て載せることができた。先行研究で見たように、一般に、戦没者名は公開されている。他の地域でのことは不明だが、地元の小学生や中学生が、課題研究や夏休みの宿題として聞き取りをする場合は、個人的な情報も話し

てくれる可能性は高いと考えられる。

3. 一次資料

先述の、アメリカ合衆国カンサス州の事例では、生徒が郷土の軍人について調べることができるだろうと述べられている。一次二次資料を使用してのそのような調査は、これまでに成されていないものであると述べている。カンサスの事例では、我々日本からでも資料のあるサイトにアクセスして、当時の兵士のリストを見ることができる。日本の事例では、現状から言えることは、今から数十年後に生徒、または、誰かが第二次世界大戦の郷土の様子を調査しようと思っても、一次資料、二次資料がないということになりそうである。

4. GISの取り扱い

谷・斎藤、(2019)が高等学校476校の「地理総合」でのGISの利用率の調査で、利用率は23.9%という結果を示し、率としては高いものでないと述べている。淡路島内で異なる市の小中学校の事情に詳しいPC操作の得意な複数の教育関係者に上記の防空壕のような調査とデジタル地図作成について尋ねたところ¹¹⁾、中学生だと操作を教えれば緯度経度を入力して場所に印をつける地図を作成できるかもしれないということである。具体的な事例は聞けなかった。このような地図作成は、教師個人の関心の高さや熱心さ、ソフトの習熟によるという回答であった¹¹⁾。

V おわりに

郷土について地図を使用して語り継いでいくという観点から、第二次世界大戦時の郷土の様子を取り上げて研究してきた。災害の語り継ぎにはいくつかの要素が必要である(森 2018)が、それを戦争に置き換えてみてきた。地域に戦争関連の事例があること、戦争関連の事物の残っていること、戦争を知る人が存在していること、戦争の話を語る場があること、戦争の話を聞きに訪れる児童生徒等が存在していること、使用する写真や話の内容があることであ

る。

地方の小さな町内会での聞き取りでは、個人的体験談も聞き取れ、防空壕の位置、疎開元、勤労奉仕先、戦没者の戦没場所、戦争生還者からの転戦場所の記録、について地図が作成できた。

A 町内では防空壕の分布地図を見て、「こんな防空壕の地図があったんか？」という驚いた感想が聞かれたが、もちろんこのようなものは過去には存在しない。地域のデータを収集し、地図化をすると、全体像が見えてくる。Broner (1964) が指摘しているように、言葉だけでなく図で表示することによって、より理解も深まる。過去には、地図表示の作業は紙媒体であり、だれでも自由に加工することが困難であった。今日デジタル化された地図に、パソコンで自由に作業のできるようになり、このように、自分たちの郷土のデータを入力して地図化が可能になった。それにより、郷土研究もより進むと考えられる。

また、学習指導要領では、持続可能な地域調査という文言、地図や地理情報システムと現代世界という文言が見られる。郷土の戦争の語り継ぎというテーマでは、これら2つの学習が同時にできるということが分かった。この事例で取り上げた町内は40数軒の小集落であるが、それでも、地図でいくつかの項目の分布を示すことができるくらいの数があった。このことは、小さな小学校でも、または、狭い地域でも、地域の調査をすれば、地図にして分布を表現することができ、地図の勉強にはなるということを示している。ここに取り上げた事例は、ある地域の特異な事例ではなく、どこの学校でも取り組むことができ、フィールドワークや地理の学習には最適な教材の一つであると考えられる。災害の語り継ぎでは、被災地で小中学高校生も取り組んでいることから、戦争の語り継ぎも地図化や聞き取りによって、同様な取り組みができると考えられる。

戦争は負の遺産であるとか、戦争を語るのは

感情的によくないことだということで、明らかになっていないことや、語り継がれていないことも多いと考えられる。冒頭で述べたように、戦争を語る人は年を追うごとに少なくなり、語り継ぎの条件に挙げた一つの条件が消えつつある。聞き取りをして記録に残すことができるのはここ数年である。事実を残しておかねば、後に検証もできない時代になりつつある。

郷土誌史は、事実を出来るだけ正確に資料として残すということにある。先行研究や過去の出版物の調査をして判明したことは、郷土では戦争について詳細な記録が残されていない所が多いが、町内会・自治会の範囲を調査すると体験の聞き取りができ、戦争の記憶を地図にして残すことができるということである。

地図化して語り継ぐ手法での効果については、今後の研究課題である。

付記

本研究は、2022年8月開催の兵庫地理学協会夏季研究大会での発表「郷土研究：第2次世界大戦を地図化して語り継ぐ」を骨子にまとめたものである。

謝辞

本稿で引用させていただいたA町内会誌史研究会の地図資料は著者が作成したものでありますが、会の方の了承を得て使用させていただいており、会に感謝申し上げます。また、教育情報提供の教育関係者にも感謝申し上げます。

注

- 1) 広辞苑（新村 2011）によると「郷土①生まれ育った土地。」とある。地域研究ではなく、郷土研究という語を使用しているのは、本研究の始まりは、町内会の郷土誌史を編纂するという計画の中での一事例であるためである。地域とすると、戦争の場合、広い範囲の事と理解される恐れがあり、また、学習指導要領の中でも「地域」という語は何々地域と

指すように広い範囲を指していると理解される恐れがあるため、郷土という語を使用している。吉水（2021）は、地域の大きさについて、「地域」という概念は、なかなか難しいものです、と述べている。

- 2) 平成 30 年高等学校学習指導要領解説には「第二次世界大戦」となっているため、本稿でもその文言を使用している。
- 3) 実質は図書館であるが、司書がいいため、室となっている。
- 4) 以下、ここでの事例は、研究会に了承を得て、地図等引用している。
- 5) 羽田（2021）『地図リテラシー入門』には、Google マップの特徴を知らずに描画した際のずれ（p. 157）などが示されている。
- 6) 洲本の紡績工場跡については、本学会で 2020 年に巡検を実施した（森ほか，2022）。
- 7) この事例では、場所名で、ピーワンニーとすべきところを聞き取り間違いと推測されるが濁音のビとなって石とに記載されていた。加えて、カタカナから他の言語への変換は困難が伴う。著者はロシア語のアルファベットの知識があるが Google マップで探せず、後日、平和祈念展示資料館に照会して判明した（2023 年 3 月 23 日資料館より回答メール）。
- 8) 佐々木博子発表『『稲むらの火』の語り部の取り組み、安政南海地震津波を語り継ぐ』，2023 年 3 月 18 日、第 8 回全国被災地語り部シンポジウム in 和歌山、於：和歌山県広川町。
- 9) 2022 年 7 月 27 日 北淡歴史民俗史料館にて聞き取り
- 10) 2023 年 3 月 21 日電話で聞き取り。
- 11) 2023 年 3 月 12、23、27 日に電話等で聞き取り
- 12) 舞鶴引揚記念館員談。2022 年 7 月 19 日、電話で聞き取り。

引用文献

浅野南町内会誌史研究会（2022）：『浅野南上組

の誌史』，淡路市浅野南町内会誌史研究会 4，pp. 2-31.

浅野南町内会誌史研究会（2023）：『浅野南上組の誌史』，淡路市浅野南町内会誌史研究会 5，作成中。

網島聖（2014）：戦間期の同業者町における取引関係と「調整」の変化—1914～1940 年の大阪・修道町の医薬品産業を事例に一，地理学評論 87-1，pp. 38 - 59.

石垣市教育委員会副読本編集委員会（1997）：『小学生の社会科 わたしたちの石垣市 3 年』，石垣市教育委員会，168 p.

一色町内会史誌刊行会（1986）：『いっしき—風土と歴史—』，一色町内会史誌刊行会，235p.

今尾恵介（2011）：『地図で読む戦争の時代 描かれた日本、描かれなかった日本』，白水社，263p.

内田和子（2010）：ため池による水害の記録と被災体験の継承—京都府亀岡市平和池の決壊を例として—，地域地理研究 16 - 1，pp. 53 - 57.

榎列史研究会（2012）：『おのころ風土記—榎列の歴史と伝承—』，榎列史研究会，195p.

奥尻町社会科副読本編集委員会（1997）：『わたしたちの町おくしり 郷土読本第 3・4 学年改訂版』，奥尻町教育委員会，140p.

加古川市史編さん専門委員（編集）（2000）：『加古川市史第 3 巻本編Ⅲ』，兵庫県加古川市，p. 690.

加西市史編さん委員会（編集）（2011）：『加西市史第二巻本編 2 近世・近現代』，加西市，pp. 526 - 528.

梶田真（2018）：第二次世界大戦期周辺に提起されたアメリカ合衆国の都市内部構造モデルとその背景，地理学評論 91 - 1，pp. 79 - 96.

菊地俊夫ほか（2022）：『地理総合 世界に学び地域へつなぐ』，二宮書店，pp. 36 - 47.

巨勢誌編纂委員会（1978）：『巨勢誌』，兵庫県加東郡社町東古瀬，266p.

徐培瑋（1999）：戦後北京の住宅建設と住宅類

- 型, 兵庫地理 44. pp. 24 - 33.
- 新宅直人 (2023) : 予想・考察場面 デジタル地図ツールで土地の標高に着目, 教育科学社会科教育 767, 3 月, pp. 16 - 17.
- 新村出 (2011) : 広辞苑, 岩波書店, 3458p.
- 谷謙二 (2018) : 『フリーGIS ソフト MANDARA10 入門—かんたん! オリジナル地図を作ろう—』, 古今書院, 122.
- 谷謙二・斎藤敦 (2019) : アンケート調査からみた全国の高等学校における GIS 利用の現状と課題—「地理総合」の実施に向けて—, 地理学評論, 92 - 1, pp. 1 - 22.
- 町誌編纂委員会 (1975) : 『北淡町誌』, 北淡町, 481p.
- 津名町史編集委員会 (1985) : 『津名町史 本編』, 兵庫県津名郡津名町, 1469p.
- 内閣府 (防災担当) 普及啓発・連携参事官室 (2021) : 中学生・高校生の語り部たちが伝える防災への思い、(その 1), ぼうさい 101, p. 30.
- 内閣府 (防災担当) 普及啓発・連携参事官室 (2021) : 中学生・高校生の語り部たちが伝える防災への思い、(その 2), ぼうさい 102, p. 22.
- 長尾亮太 (2021) : 狙われた航空機工場 関西で最初の本格空襲 4、神戸新聞, 2021 年 8 月 20 日, 明石版, p. 19.
- 永田實 (1993) : 神戸市北区山田川流域の水車—明治期から昭和初期にかけて—, 兵庫地理 38, 55-68.
- 那覇市教育委員会 (1998) : 『小学校社会科副読本—小学校第 3 学年用—新訂わたしたちの那覇市』, 那覇市教育委員会, 144 p.
- 西川善夫 (1982) : 『故里の鎮魂史 遙かなる散華』, 214p. (発行者名なし)
- 羽田康祐 (2021) : 『地図リテラシー入門 地図の正しい読み方・描き方がわかる』, ベレ出版, 286p.
- 浜口芳昭 (2009) : 『ふるさと小才角』, 浜口芳昭, 471p.
- 東端区誌編纂委員会 (2010) : 『東端区誌』, 東端区誌編纂委員会, 211p.
- 被災者聞き取り調査記録編集委員会 (2012) : 千葉県旭市 語り継ぐいいおか津波—東日本大震災 被災者聞き取り調査記録集—, 旭市まちづくり事業認定団体◎光と風キャンペーン実行委員会, 245p.
- 広田邦芳ほか (1995) : 『震源地の真上にある「震源地」の高校生たち』, 兵庫県立淡路農業高等学校, 84p.
- 北淡西中学校 2 年生 (1996) : 『あの時、私は、、95. 1. 17 兵庫県南部地震の記録』, 北淡町立北淡西中学校, 54.
- 松本静枝ほか (2000) : 『のびゆく足利 3 年』, 足利市立教育研究所, 128p.
- 松本裕行 (2018) : 1942 年に記録された空中写真の分析による戦時中の兵庫県南東部沿岸部の地理的空間の変容—大阪周辺を撮影した航空写真による研究紹介—, 兵庫地理 63, pp. 17 - 35.
- 三木市立みき歴史資料館 (2022) : 三木飛行場の記憶, 企画展チラシ.
- 水足史誌編纂委員会 (1990) : 『水足史誌』, 加古川市野口町水足町内会, 254p.
- 水元繁 (2007) : 岡山県東備地区における耐火レンガ工業の発展と課題, 地域地理研究 12, 28-39.
- 光岡浩二 (1996) : 両大戦間日本農村の結婚難問題, 地域地理研究 1. pp. 4 - 13.
- 南あわじ小学校社会科副読本編集委員会編 (2021) : 『キッズ南あわじ』, 南あわじ市教育委員会, 96p.
- 村上仁士 (1995) : 南海・チリ—地震津波録 海からの警告, 高知県須崎市, 151p.
- 森康成 (2011) : 高等学校における防災科目の実践 10 年, 地域地理研究, 17, 2, pp. 47 - 61.
- 森康成 (2018) : 防災教育における震災の語り部活動の分析と提案 野島断層とその被災地を事例として, 安全教育学研究 17, 3, pp. 47 - 58.

- 森康成（2022）：淡路島特有と言われる農業水利用語「タズ」の分布の検証，岡山大学創立 70 周年記念地理学論文集編集委員会，『地域と生活Ⅲ 岡山大学創立 70 周年地理学論文集』，岡山大学出版会、pp. 257 - 274.
- 森康成ほか（2022）：教材という観点から洲本城下町を見る，兵庫地理 67，pp. 95 - 102.
- 森田耕平（2018）：両大戦間期の貨物輸送における自動車の進出と国有鉄道の対応，地理学評論 91-6，pp. 462-486.
- 文部科学省（2019）：『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 地理歴史編』，東洋館出版社. 451p.
- 文部科学省（2020）：『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』，日本文教出版. 217p.
- 文部科学省（2018）：『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』，東洋館出版社. 237p.
- 吉水裕也（2021）：「地域」を授業する，教育科学社会科教育 749，9 月号，pp. 28 - 31.
- Broner, M. A. (1964) : Stand Up and Be Heard. *IEEE Transactions on Engineering Writing and Speech*, EWS-7, 3, pp. 25-30.
- Scheuerell, S. (2021) : Google Tour Builder: Tracking the Impact of Civil War Veterans in a Kansas Community. *The Social Studies* 112, No. 2, pp. 91-102.

小学校社会科副読本

上記以外は以下に示す。詳細は省く。

宮城県志津川町、神奈川県鎌倉市、小田原市、静岡県湖西市、和歌山県田辺市、徳島県鳴門市、愛媛県伊方町、高知県土佐清水市、宮崎県えびの市、鹿児島県上屋久町、瀬戸内町。

（もり やすしげ・北淡震災記念公園震災の語りベボランティア）